

# なな山だより

なな山緑地の会会報 第14号 2009・1

## '08 なな山であそぼう！を終えて

二小おやじの会 馬渡俊豪

平成15年にスタートした「なな山であそぼう！」も今年で5年目になり、恒例年中行事となってきました。これも、なな山緑地の会スタッフの方々のご理解とご協力の賜と、改めてお礼申し上げます。

スタート当初はカブトムシの幼虫採取のイベントで始まったと聞いていますが、5年たった現在では、自然の恵みであるなな山の木っ端、丸太、木の実、葉っぱを使っての木工工作やのこぎりを使っての丸太切り、そして落ち葉を集めて作るプール、ランチタイムには各々が持参したお弁当に、PTCA 特製の豚汁が配られるなどなど、なな山緑地の会の方々、PTCAお母さん、当日参加のご父兄、二小おやじの会スタッフのご協力を頂きながらバリエーションの増えた内容で開催する事が出来てきました。



今回はより「なな山」を体感してもらうという事で新たに「キーワードハイク」を追加しました。「ななやま♡」の5文字を山の木々に結び、場所を示した地図をたよりに探して言葉を完成するというものです。これはキーワードがシンプルだったせいか、事前に感じていた子もいたようでしたが、いざ始めると、なな山を所狭しと元

気に走り回り「あった～(^.^)！」と喜ぶ子、「やっぱりな(^.^)」とほくそ笑む子、「教えてもらっちゃった！(^.^)」とすっかり戻っていく子と、山頂で見守りをして、様々な微笑ましい場面に立ち会うことが出来、大変な役得でした。そんな子どもたちを見ていて、Wii やDS、PSPが、問題視されていますが、芯の部分には我々の子供の頃と変わらない自然を楽しむ心のような何かを感じることが出来たのは、大きな大きな収穫でした。また当日は前日の天候が嘘のような快晴に恵まれ、絶好のなな山日和の中で開催出来たことは、誰の日頃の行い？とあずかり知らない井戸端話となっていたようです(^.^)。2回に及ぶ現地での打ち合わせも快く受けて頂き、緑地内を案内して頂いた際に、今後のなな山緑地は、新エリア、将来拡大区域と面積が広がる予定であることを教えて頂きました。「なな山であそぼう！」の今後の更なる展開を期待させて頂きたいと思っています。

最後になりますが、会長の高木さんを始めとしたスタッフの方々に活動日でない日にも関わらず参加して頂き、本当にありがとうございました。

写真 = 参加者全員で記念撮影

## ごあいさつ

あけましておめでとうございます。

昨年は、会発足5周年という節目の年に東側の山、約0.7ヘクタールの管理を市より委託されました。秋より本格的に作業が始まりましたが、倒木の多さに驚きました。まず、倒木の整理からスタートしましたがまだ始まったばかりです。また、同じ里山でもほとんど人の手が入っていない山なので、落葉樹が少なく、イヌツゲ、ヒサカキ、シラカシといった常緑樹がほとんどを占め、冬でも葉を落とさないため、陽が入らず、下草もあまり生えていない鬱蒼とした森になっています。これはこれで良いかもしれませんが、皆さんと相談し、この山のありかたを考えたいと思います。また、今年さらに東側の約1.3ヘクタールのエリアが追加される予定です。これを管理するためには新しい会員をもっと増やしていかなければなりません。ぜひ、友人、知人にこの会の趣旨をPRして入会を勧めていただくようお願いいたします。

今年も、会員のみなさま、地域のみなさま、そして行政のみなさまのご理解、ご協力をお願いし、ごあいさつとさせていただきます。

なな山緑地の会 会長 高木 直樹

今、子どもたちの暮らしの中で、圧倒的に欠けているもの、それは屋外での、とりわけ自然環境の中での体験(学習・遊び・作業)ではないかと思う。



四季の変化の中で樹木、草、昆虫、小動物、土中生物、野鳥の暮らしを体験から学んでいくこと。陽光、日陰、風、雨、土、水を含め、五感をフル活用すること。このことが子どもの精神的、情緒的、心情的な発育にどれだけ不可欠なものであるか、誰もが充分にわかってはいる。しかし、現実には社会問題となっている子どもたちの行動には、親も学校も地域もどうしたものかと困惑しながらも、自然環境の体験不足に思いを馳せることには及んでいないように感じる。気づいてもどうすればよいか親も教育者も分からないのだろう。子どもを育てる主たる世代ですら、既に自然環境の中での体験が希薄なのだから。

それをついつい規則を強化したり、ケイタイ、防犯カメラ、など先端テクノロジーに依存し、閉鎖的環境を求めたりしている。これは逆効果であり、子どもたちの成育に良いことはないに分かっていながらである。

12月6日、なな山緑地に小学生が低学年を中心に50人ほど遊びに来た。「二小おやじの会」が企画し、「なな山緑地の会」が全面的に協力した催しだ。父母、先生など保護者は20人。企画立案し、子どもたちの世話を買って出て、ここに集まった大人たちには敬意を表したい。

地域と学校と保護者とが共同で推進させるこういう取り組みこそ、成長期の子どもの教育問題解決の大きな鍵となるような気がする。

雑木林の中での子どもたちの活躍ぶりは、別の稿に譲るとして、その体験から得たものは計り知れないものがあるだろうと思う。これからも、いくたびとなく、ここへ足を運んでもらいたいと願う。

われわれ受け入れ側も子どもたちの歩みとともに、どのように対応したらより意義のあるものになるか考え続けていきたい。

写真 上 = 雑木林観察で子供たちに囲まれる筆者 下 = カブト虫の幼虫採りに夢中の子供たち



## 広げよう会員の和

リレー随筆(14)

故郷となな山緑地

高橋 彰

私は、徳島県の神山町に生まれ育ちました。山林が八割余りを占める急傾斜地の多い地形で、川に沿って田や畑が開けた典型的な山村です。特産品はスダチです。九月に行われる目黒のサンマ祭りです。使われているスダチは神山直送品です。

山林は、昭和三十年以降に雑木林が伐採されてスギとヒノキが集中的に植林されてきたため、どの山も年間を通して濃い緑一色の単調な風景に変貌しました。しかし、近年、幹線道路沿いに三千本のしだれ桜の植樹を推進していますので、花と緑に包まれた美しい故郷に変身するのを心待ちにしています。

さて、一昨年のグリーンボランティア講習会を終えて、なな山緑地の会に参加させていただいて早くも一年になりました。この間に講習会以外に使用経験がなかった刈払い機やチェーンソーが曲りなりにも使えるようになってきました。ただし、機械の威力に驚嘆はするものの、仕事の出来ばえにはまだ疑問が残るという状況です。でも一年間作業してきたことで、季節ごとに実施する作業の内容やその要領も少しずつわかってきたように思います。

今後も、故郷を思い出させる、里山の土の独特の匂いと木々の放つ温かさを体を感じながら、安全に、無理をせず、楽しむことを心がけながらがんばっていきたくと思っています。

さて、次のランナーは、第三の青木さんこと青木賢治さんをお願いします。どうぞよろしく。



タチツボスマレ スミレ科

*Viola grypoceras* A gray

12月の初旬、日だまりにタチツボスマレが一輪咲いていた(写真=右上)。スマレ属は春には花を咲かせるが結実せず、夏から秋にかけて閉鎖花(開花せず、つぼみのまま結実する)を出し、さく果を結ぶ。「スマレ」は「スマイレ」の略で、花の形が大工道具の墨つぼに似ていることによる。

花のない季節、冬が長い北国ほど、春の花を待ちこがれる気持ちは強い。そんな冬にも花を咲かせ、夏の食べ物を食する贅沢を、いにしえの人も味わっていた。西暦1世紀ローマではティベリウス帝(14-37年在位)が医師の勧めで、冬の間中、キュウリを食べていた記録がある。容器の上に透明な石(雲母を薄くはいだもの)を被せ、キュウリを栽培していたという、キュウリの促成栽培の記録だ。方法はいろいろだが、そうした植物の栽培は各地で行われていたようだ。



温室の始まりは17世紀頃といわれている。ヨーロッパにおいては国王や貴族がオレンジを何百鉢も鉢植えにし、夏季は庭に出してオレンジ園を作り、冬季にはガラス窓のついた建物の中にその鉢を移して保護していた。その建物をオランジュリーと呼び、これが温室の始まりと見られている。初夏にオレンジの香りを楽しみ、冬季にオレンジを食べることができたのだ。オランジュリーの中では暖炉やストーブが炊かれていたという。寒中には一晩中、バスケットに入れた火を鉄製の車に積んで引き回ったという記録もある。その後太陽光を採り入れるため、ガラス面を多くし、太陽の入射角度に傾斜させる方法が考案され、次第に薬用植物やランなどの熱帯植物を栽培する温室となっていった。

18世紀に入ると産業革命による工業の発達により、ガラス製造技術やボイラーの発達で、温室は急速に進歩する。ガラスと鉄による工法は採光のための画期的な方法であり、温室のみではなく、用途はさまざまに広がっていった。

19世紀初め、イギリスではキュー王立植物園のパームハウスのように、曲線屋根の温室も建てられ、暖房設備も改良され、温湯暖房が普及するようになった。19世紀中期には園芸家であり、建築家でもあったジョゼフ・パクストンが、板ガラスと鉄柱及びサッシを組み合わせて単位モジュールとするプレハブ構法を編み出し、各種の温室が建てられていった。同じ工法でパリではウインターガーデン、ロンドンでは第一回万国博覧会会場として水晶宮(1851)が出現した。どちらも現在は残ってはいないが、ヨーロッパでは温室をはじめ、駅舎、アーケード、博物館など、温室に端を発した工法を用いた当時の公共施設が今も使われている。

(写真)

1. 王立キュー植物園のパームハウス(イギリス 1844~48 デシマス・パートン設計)。温室界の白鳥ともいふべき優美な形は、ヨーロッパの温室作りの手本となった。
2. 第1回ロンドン万国博覧会会場の水晶宮(1851 ジョゼフ・パクストン設計)。鉄と30万枚のガラスを使った巨大な建物。1936年焼失。



3. オックスフォード大学博物館(イギリス 1855~60 建築) 天井からの採光により、展示物を自然光で見ることができた。
4. ロンドン、ホールマーケットのアーケード。



	1.	
2.	3.	4.

# なな山日記(活動・観察記録)

とたに えま

## 2008・10・12(日)快晴 気温18

素晴らしい秋晴れ！3連休の中日でも参加多い。参加者18人。  
「作業」畑=ダイコンの間引き、堆肥入れ。斜面=クズ刈り。 広場・住宅付近=草刈り。東の山=倒木整理。広場=スギの枝打ち。全域=植物養生。  
「観察」見つけた植物=オケラ、カシワバハグマ、クコ、ホウチャクソウの実、ガマズミ。 堆肥を畑に運び、置き場を空にする、カブトの幼虫を保護(写真右)。



## 2008・10・26(日)雨のち曇り 気温18

雨でも参加者多数、新しい場所も着々と整理が進む。参加者21人。  
「作業」畑=サツマイモ1畝試し掘り(参加した2家族へのサービス)。道沿い=草刈りと掃除。斜面=カヤ刈り、竜小のドンド焼き用。東の山=作業用の階段と道づくり、倒木の片付け。シュロ縄づくりの講習会。  
「観察」見つけた植物=ヤクシソウ、エビヅルの実、ワニグチソウの実、ナルコユリの実、柿の実(東の入口)。

## 2008・11・9(日)曇り 気温14

サツマイモ豊作、寒かったが参加者、見学者大入り！ついに大台...。参加者30人。



「作業」畑=サツマイモ収穫、大豊作！(数も大きさも)(写真左)、後を耕して堆肥を入れる。斜面=カヤ刈り、ドンド焼き用。東の山=倒木整理。西の山=落ち枝拾い、下草刈り。

「観察」見つけた植物=ナルコユリの実、トキリマメの実。

第二小おやじの会から4名、12/6の「なな山であそぼう！」の下見に来る。会員の友人、知人が6名参加、緑地の見学や一部作業を楽しんだ。

## 2008・11・23(日)晴れ 気温18

サトイモも大収穫。昼にサツマイモと蒸かして食べる。参加者14人。  
「作業」畑=サトイモ収穫、ヤツガシラも取れる、収穫の後堆肥を入れる。東の山=倒木整理。西の山=下草刈り(南側斜面、梅林付近)。斜面=ドンド焼き用のカヤ集め、竜が峰小のお母さんたちが来られた。  
「観察」見つけた植物=カラタチバナの実(写真右)、ハルノノゲシ、リンドウ、ヒラギ、ムラサキシキブの実、ヤブムラサキの実。



## 2008・12・21(日)晴 気温19 暖かい

晴れて暖かく活動日和。GV7期生の赤尾、出口、星野さんが新入会、昼トン汁。参加者24人。  
「作業」東の山=倒木整理。道路脇=落ち葉掃き、集め。全域=クズ掃き、落ち葉囲いに入れる。畑=ダイコン収穫。東の谷=シイタケ収穫。全域=植物観察・養生。



「観察」見つけた植物=アオツツラフジの実、ジャノヒゲの実、マンリョウの実、タチツボスミレの花(今年も季節を間違えたのか?)。

7期生から3名の方が入会され、出口さん、赤尾さんは奥さん子供さんと、星野さんも子供さんと参加された。

昼に恒例のトン汁パーティーをした(写真左)。なな山で取れたダイコン、シイタケをタップリいれて作る。席上新入会員もいるので自己紹介などする。今日は今年最後の活動なので、最後に会長から。「今年1年無事故で過ごせて良かった。来年はさらに東の約1.3haが追加される。今の人数では足りないので、会員を増やすことに努力したい。」と挨拶があった。

なな山だより 第14号  
発行  
発行責任者  
住所  
ホームページ  
編集委員

平成21年1月11日発行  
なな山緑地の会  
高木直樹  
多摩市和田1394 13  
鎌田文雄・中原君代・戸谷恵麻

### 編集後記

あけましておめでとうございます。  
今年さらに東側の1.3ヘクタールも活動エリアになります。また、講座修了生の3人を迎え、会員は49名になりました。当会も益々充実してきました。新しい年に向かってスタートしましょう。 K